

生活者ネットワークの

活動レポート No. 101



発行者 ■ 西東京・生活者ネットワーク



発行責任者/渡辺 嘉津子 発行日/2017年7月10日
〒202-0015 西東京市保谷町6-25-1-102
FAX/042-410-0014 E-mail/nishitokyo@seikatsusha.net

TEL 042-453-4121



障がいがあっても 地域に住み、地域で働きたい

生活者ネット福祉部会では、障がい者が地域で安心して暮らし続けられるまちづくりをめざして調査活動を続けています。目の前の一人ひとりに合った「生きる場所」を探し続けて、6カ所のグループホーム、10カ所の働く場所を作ってきた、日野市の認定NPO法人やまぼうしを見学してきました。

めざせ、農福連携

耕作放棄地の一部を活用した「ユギムラ牧場体験農園」では、障がい者が日中活動として、農作業やヤギの餌やりなどに取り組んでいました。建物の中にとり組んでいなくても、外での作業は好き。黙々と農作業に取り組んでいる様子を見せていただき、国も取り組み始めた農福連携の先進事例にふれることができました。



ユギムラ牧場での農福連携の取り組み

農業は、土づくりや種まき、草取り、収穫など作業の切り分けが可能。そのため、年間を通じて障がい特性に合わせた仕事が作りやすいとのこと。農業者の後継者不足は西東京市でも大きな課題ですが、農地を守る視点からも、障がい者の働く場として農地を利用させてもらい連携できないものかと感じました。



大学構内の「スローワールドカフェ」にて

大学内に「スローワールドカフェ」を展開

採れた野菜はアンテナショップでの販売のほか、首都大学東京や法政大学多摩校舎など、やまぼうしが近隣3大学の構内に開設したカフェでも使用されています。接客の得意な人はホールやレジで、決まった作業の得意な人は調理場で、それぞれの個性を活かして働いています。

やまぼうしが法人設立時から取り組んできた「農あるまちづくり」事業を発展させた、農・福・商・学連携による「スローワールド事業」は、就労支援、日中活動にとどまらない障がい者のエンパワーメントと多様な働き場の場づくりを見事に実現していました。

廃校になった小学校をそのまま利用

カフェで販売されていたお弁当は、廃校になった小学校の給食調理室で作られています。「デイセンターワークプラットフォーム」は、就労継続支援A型（障がい者の就労支援制度の一つで雇用契約に基づく継続就労。給料は最低賃金以上）事業として運営され、1日300食のお弁当のほか、パンの製造・販売も行っています。西東京市には同A型はまだありませんが、だれでも取り組みやすいお弁当の製造なら、可能性があると感じました。



元給食調理室を障がい者の就労に活用

負担。今後の課題は建て替えのための資金調達とのこと。人口減少の予測のもと、西東京市でも公共施設は減らす方向ですが、使われなくなる建物を市民の力で活用し、だれもが住みやすく、働きやすい地域づくりを実現したいとの思いを新たにしました。

コラム

農地を共生社会づくりの舞台に ——都と市の動向

昨年5月に閣議決定された「都市農業振興計画」は、これまで「宅地化するべき」としてきた都市農地を、都市に「あるべきもの」と明確に位置付けた。東京都は都市農地の持つ多面的機能の一つに健康増進機能を掲げ、今年度開始する「農地活用事業」においてリハビリや高齢者の健康づくり、障がい者の自立支援を挙げている。

西東京市では、中町にある農のアトリエ「蔵の里」で高齢者向けの農業体験を行っている。

障がい者の農作業への参加も一部で始まっている。さらなる受け入れの可能性や支援体制づくりについて、「農業」と「福祉」がそれぞれの理解を進めることが重要だ。

畑を集いの場に位置付け、野菜づくりやイベントを行い多世代型「コミュニティ」を生み出す、市民主体のユニークな取り組みも始まっている。共生社会づくりの舞台、実験場としての都市農地の可能性に期待したい。



昇降口を改装したおしゃれなベーカリーカフェ

どうする?! 公共交通空白地域の移動

西東京の交通弱者対策を考えるために、4月末、中央大学教授の秋山哲男さんを講師に、学習会を開催。内容は、高齢者の健康維持には外出支援が不可欠だということ、西東京市の公共交通の現状分析、諸外国・国内他市の先進事例の紹介などでした。

「コミュニティバスは、利用できない人（地域）がどうしても生じてしまいます。利用したい人が、利用したい時に、利用したい場所から場所へ移動できる方法（デマンド交通など）を検討した方が、税の公平な再配分に適しているのでは、という仮定をもとに学習会に臨んだところ、バスの運行計画ではなく、移動手段そのものをどうするかを考えるべしとの先生の指摘に納得。西東京に適った移動方法を、利用者の声を聞きながら構築していく時だと実感しました。



公共交通学習会